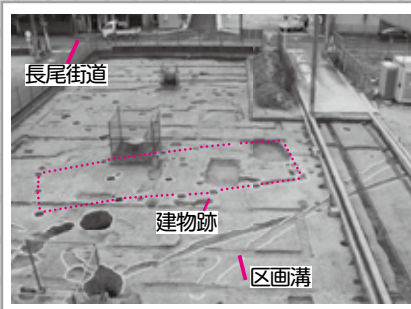


清水の石仏と清水遺跡の発掘

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲明治末～大正初年ごろの清水周辺地図
(明治41年測量、大正元年発行)



▲清水遺跡で見つかった建物跡と溝跡
(松原市教育委員会提供)



▲阿弥陀如来石仏(南新町5丁目)

長尾街道に祀られる阿弥陀仏 古代の豪族居館と条里制地割

南新町四丁目の大泉緑地松原地区〔歴史ウォーク247〕から、北へ府道堺大和高田線を越え、布忍小学校沿いに真直ぐ歩くと長尾街道と交差し、七世紀ごろにはつくられていたと考えられる古道で、江戸時代には堺と大和方面を結び、多くの人々が利用しました。交差点北東角には新町郵便局が建っていますが、反対側の南西角の大橋栄子さん宅前には二体の阿弥陀如来坐像の石仏がお堂の中に祀られています。

石仏が祀られている地は、南新町五丁目ですが、江戸時代には河内国丹北郡清水村とよばれ、ここは清水村の最東端にあたる出入口でした。石仏前の北側街道沿いは、「殿海道」という小字名も残っています。

阿弥陀像二体は、いずれも上品上生の定印を結んでおり、右側は鎌倉時代後半、左側は室町時代ごろの作と思われます。今では右側は観音さん、左側は地藏さんとして親しまれています。大橋さんの義祖父の房吉が次男・駒藏宅をここに新築した大正後期に祀ったと伝えられています。とくに、右側の阿弥陀像は花崗岩で舟形光背をつくり、肉づきもよく写実的なお姿です。下部はコンクリートで固められており、現像高

は三〇cm程を測ります。堺の浜とも長尾街道沿いの川から見つかったとも言われています。

江戸時代以降、明治・大正期にかけて、このあたりは田畑が広がっていました。布忍小学校沿いの南北の道も長尾街道よりも南には道はなく、街道から北へ高木村(現北新町)に通じる村道が走っているだけでした。もともと清水村には、明治三年(一八七〇)の社寺調書に瓦葺の「辻地藏堂」があると記されていますが、同地が村の出入口ということもあり、人々の安全を守り、方除も願って新たに石仏を祀ったものと思われる。

一方、長尾街道の清水西端は、現在の府道我堂金岡線の手前までです。府道も明治・大正期までは長尾街道より南方面に道はなく、北側は我堂村(現天美我堂)や芝村(現天美西)に通じる村道が延びていました。その我堂との境界に接して、街道沿いに、児童公園と清水ヶ丘公民館が見られます。北新町六丁目にあたりますが、同地付近は古代の駅(牛馬の休息所)に関わると思われる「馬取淵」という小字名が残り、西側の我堂には「大和街道」の小字名も伝わっています。

平成十二年(二〇〇〇)十一月から翌十三年三月にかけて、この地に新しく住宅が建設されることになり、松原市教育委員会が発掘を行うことになりました。過去の調査でも、古墳時代後

期の遺構や遺物などが検出されており、清水遺跡とよばれていました。

調査の結果、児童公園の西側で、六世紀前半ごろの八棟の掘立柱建物とそれらを囲むように配置された溝が見つかりました。一般の農民の家屋ではなく、豪族の居館(屋敷)と考えられます。溝は五〇cm程度の深さで、敷地を囲む区画溝と思われます。敷地内には主屋や倉などが建っていたようです。土師器や蓋つきの杯や高杯の須恵器も出土しました。

同時に注目されたのは、これらの建物の配置が現在の長尾街道上の東西の土地割方向ではなく、いずれも北西から南東の棟方向であったことです。その上、現長尾街道の下層にも建物や溝が延びているようです。このことから、長尾街道の開通は、六世紀末前後の飛鳥時代以後と推測されるのです。

さらに、八世紀の奈良時代の溝跡も一緒に検出されました。これは、この時代の土地区画である条里制の坪境遺構と考えられます。市域でも、条里地割が早くから清水で行われていたことがわかりました。

ここでは、中世の溝跡も見つかっており、条里遺構が脈々と受けつがれていることがうかがえました。清水遺跡は、長尾街道の設置や街道沿いに発達した清水の集落の形成を知る上でも、貴重な発掘となったのです。